
馬鹿ですが何か？

祿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

馬鹿ですが何か？

【Zコード】

Z9262Z

【作者名】

祿

【あらすじ】

まつたりと生きてきたとある馬鹿と、それに比べてキチッと生きてきた男が、神の手違いで死んでしまう。かわりにインフィニットストラトスの世界に転生させられることがある。

おまけに変な能力も付けられていた。
二人は、まつたりと生きて行けるのか？

唐突だけが俺は思い付いた。

命は一つであり、人間に前世や来世など”次の人生”はないと。人は死んだら、そのまま人格や記憶など消えて無くなる。

前世来世、天国地獄、転生蘇生などは人間の都合のいい妄想や想像でしかない……けつぎょくは存在しないものだと。

「…………で、結局なにがいいたいんだ?」

「やだなあ、てっちゃん。もうわかつてるくせに」

はあ、とため息をつく友人を飛び越えて親友（仮）の佐久間哲、通称てっちゃんは、めんどくさそうな顔をしながら見てきた。
まあ……あれだ。自己紹介しようとしますか。

「岡山祿 17歳男 乙女座で誕生田は想像に任せるとして血液型はO型だ。よろしくな!」

「誰に自己紹介してんだよ……てかさつきのは何なんだよ」

「いやあ、バスの中つてひまじやん?だから頭にポツと出てきたのがさつきなのだ。で、一度しかない人生を無駄にせず、しっかりと生きていくてほしつて言いたいわけ」

「たまにいいとつぽこ」と言つよな

そんな雑談をしながら、てつちゃんの高校に向かって歩いてくる。
てつちゃん曰く、今日は文化祭なんだって、もう毎年のことでな
にしてんだろうね？

重役出勤とはなかなか偉くなつたんだな。

「お前はまつとへと寄り道するからな。その間に田が暮れる」

「へー、そりゃ大変だつたね？」

「お前のことだぞー？」

ぼてぼてと歩いていると、横断歩道のど真ん中に金色に光る円形の
なにかが田に入った。

てつちゃんは気づいてないみたいで、ペペペペ何か喋つている。

「（）のまま気づかれないように確認して、500円玉だったら
回収（）」

「（）にしつ絶対聞いてないな…今度は何を考えてんのや（）

金色に光る円形のなにかの横を通り過ぎるとまた横田で確認。
それは期待していた通りの500円玉だった。
車がこないのを確認して、すぐにしゃがみ込む。

「みどり危ない！」

「へ？」

横断歩道を渡つたところにいたてつちゃんが、すぐ焦つた顔をしていた。

右側がやたら騒々しくて、見てみるとトラックがこちらに突つ込んできていた。

避けようにも距離は25メートルくらいで、スピードも速くて、とてもじやないけど避けられない。

「……まじか？」

「ん？ 待てみどり。なぜ俺を掴む？」

「てつちゃんシールドー！ がぐ！」

「ぶるうわー！」

あえなくトラックと正面衝突。もちろん俺とてつちゃんは即死。

一度きりの人生をどうのこうの言つてた奴が友人というより、悪友に近いやつを道連れにするのは割と愉快（笑）

……………か

「……………」

「ああ……か……の……バカ……

「……………（ニヒリ）」

「おきんかー！」の馬鹿者ー」

「ううせえな……人が気持ち良くなっているのに耳元で騒ぐなよ、糞豚。
殺されたくないなら黙つていろ。食い殺すぞー。」

「……………（ウルウル）」

「み、みどり？少し落ち着けよ、な？」

聞き覚えのある声がしたので、そつちに目を向けると悪友でいたりも
んがたつていた。

「あれ？おかしいな……てつちゃんは俺が殺したはずなんだけど、
何で元気に立つてんの？」

「やつこえばお前……俺を道連れにしてくれたよな？」

「記憶にないな。改ざんされたかも」

「あー。そのことなんじゃが……あれはわしのせいなのじゃ」

口調に似合わないような容姿をしている女性（仮）は、申し訳なさそうに罪を自己宣告してきた。

よく見るとセミロングの黒髪で小柄、モロ好みに当たる。

「あなたのせいってビリーハーことですか？」

「ちと手違いでトラックをお主に確實にぶつかる距離に置いてしまつてのう……まさか友人を盾に使う鬼畜な奴だとは思つておらんかつたがな」

「だよねー、ちゃんと車がこないのを確認したのにトラックが來たのは不思議だつたからね」

「こん畜生……一度きりの人生をどうのこうのって語つたあとなのに無駄死にじやないか。

てかこの人は何物？ 果物？ たべていいのかい？

「食べれないから落ち着けみどり。話が進まない
「わしは神じや。まああれじや、お主達を転生をせる」としか償え
んがいいかの？」

「まあ生き返れるなら俺はいいですけど」

「（「転生へ…せりあがれ」を既定したばかりなのに）実在するところ新事実……
これは新たに新みどり理論を考えなきや（」

新みどり理論を考えている間も、話し合いは進んで行った。
交渉とかはてつちゃんにいつも任せきりなので、けつこうの信頼して
る。

いろいろ質問されたけど、できとうに返事しどいた。

「それじゃあ、転生をせらるんかい。準備はよいか？」

「はい」

「元の世界だよね？」

「いいや」

「え？」

てつちゃんの返答に驚いて「足元が光始めた。
てつちゃんに視線を戻すと、やつぱつたつて顔で教えてくれた。

「俺達がこくのはインフィニットストラトス……ISの世界だ」

「まてまてーそれは俺がまつたりできないといつ最悪のフラグが立
つてしまつじやないか！」

神（仮）とてつちゃんは微笑んでゆっくつと口を開いた。

「「どんまい」」

「「うぬせええ！転生中止！やめい！」

必死の抵抗はむなしく、光に飲み込まれた。

二人を転生させた神は一人の立つていたところを見つめてたたずんでいた。
そして自分の体を抱き、身震いすると顔を紅潮させてうつとりとした。

「.....ふふふ。みどり...か」

神はスウッと姿を消した。

次の瞬間にその空間は割れて無くなつた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9262z/>

馬鹿ですが何か？

2011年12月28日23時46分発行